

論文 / 著書情報
Article / Book Information

論題(和文)	知財見聞録, 厳格な上座部仏教を堅持するマンマー
Title(English)	
著者(和文)	田中義敏
Authors(English)	Yoshitoshi Tanaka
出典(和文)	発明, Vol. 114, No. 5, pp. 30-31
Citation(English)	, Vol. 114, No. 5, pp. 30-31
発行日 / Pub. date	2017, 5



知財見聞録

厳格な上座部仏教を堅持するマンマー

東京工業大学 工学院 経営工学系・経営工学コース 教授 田中 義敏

ヤンゴン大学でセミナー開催

2017年1月の首都ネピドーにおける知財セミナーを本誌4月号で紹介したところであるが、2月18日には、ヤンゴン大学において知的財産教育のためのセミナーが開催された。同大学では知的財産教育セミナーが昨年も開催されており、早々に、知的財産教育をカリキュラムに組み込む準備に取り掛かるようである。

今回のセミナーは、日本の大学における知的財産コースの経験を学ぶことを目的としており、具体的には、教育ポリシーに関する議論、知的財産の重要性をどのようにして学生に指導するか、知的財産教育のカリキュラム・シラバス、学生の参加を促す講義の事例紹介などに焦点を当てた。講演者は、筆者に加えて、教育省知的財産部部長 Moe Moe Thwe氏、明治大学法科大学院教授・熊谷健一氏、JETROバンコクに駐在する日本弁理士・石川勇介氏であった。また、参加者は、大学において知的財産教育に従事する教員を中心としていた。

大学における知的財産教育

大学における知的財産教育の設計には、当然ながらその狙いについて十分な議論が必要である。単に、知的財産権関連法を講義するだけでは不十分なものになってしまうだろう。

ベネチアにおける知的財産権の発祥

に始まり、古くから知的財産権制度を導入してきた現在の先進国でも、制度導入当時にはさまざまな狙いがあった。外国からの技術導入、海外の優秀な技術者の招へい、個人の所有権の確立とともに知的所有権を保護、審査主義の導入とともに世界の技術情報を集約、情報公開によりさらなる技術開発の促進、国民的な知的財産意識の高揚、市場における模倣品の排除など、さまざまな狙いが考えられる。

この狙いによって、教育の内容も変わってくるであろう。要するに、国づくりの議論のなかで知的財産教育の目指すべき方向を考える必要があるわけである。

また、どのような学生を対象とするのかという点も重要である。知的財産の創造、保護、活用という知的創造サイクルには、開発者などの創造に係る人材、弁理士や審査官のように保護に係る人材、企業の事業において知的財産を活用する人材など、育成すべき人材対象もさまざまである。これらの人材がバランスよく養成されていかなければ

知的創造サイクルは効率よく回らない。したがって法学部における知的財産権法の教育、理工学部における知的財産の創造と活用に関する教育、ビジネススクールにおける知的財産の活用マネジメントに関する教育など、総合的な教育体制を整備していく必要があるだろう。

追いつくためのスピードが求められる

発展途上国においては、何事もすごいスピードで進捗していく。日本が30年かけて行ってきたことを10年程度で完了すると考えておくと間違いない。

わが国は、1884年の商標制度、1885年の特許制度の導入と、既に百三十数年間の年月をかけて制度の整備、運用の充実を図ってきた。しかし、今、制度導入を検討している国が、制度運用の充実や産業人および一般人への制度普及などに130年間も費やすことはできないし、現実的にはもっと速いスピードが諸外国からも求められている。

既に大学内で知的財産教育の準備が



日本人講演者らと筆者のファン（！？）



ヤンゴン大学のセミナー参加者と記念撮影

着々と進んでいる。世界中から支援協力を得て、多くの知識や経験を共有してものすごい勢いで追いついてきているわけである。より質の高い教育をできるだけ早く開始できるようにするための協力が重要であり、そのような姿勢が当事者からも強く求められるものとする。

さて、先月号では、ミャンマーの化粧品Thanakaを紹介したが、この機会にミャンマーならではの人々の心の視座を紹介してみたい。

上座部仏教を堅持

ミャンマーというと「日本と同じ仏教国」と表現してしまう方も多いが、仏教とひとりでいっても、日本、中国、ベトナム等の「大乘仏教」とは異なり、ミャンマーでは、「上座部仏教」が信仰されている。

実は、お釈迦さまが説いた仏教の教えは、日本に伝来する過程で多様な解釈が付加され、長い年月をかけて変化してきた。またさまざまな宗派を生み出し、大乘仏教として普及して、出家しない一般庶民の救いに焦点が当てられたものになった。

一方、「上座部仏教」は、基本的に、出家者に対するものであり、厳格な教えが忠実に守られている。出家し僧侶となると、多くの厳しい戒律を守り、一般庶民に代わって一般庶民ができな

い修行を行う。それ故に、ミャンマーでは僧侶は格別に尊敬の念をもって見られる存在となっている。お釈迦さまが説いた教えを最も忠実に厳守しているのがミャンマー仏教だといわれる。

日本の大乘仏教では、修行者が仏教信徒を救済しようとするのに対し、上座部仏教は、各人が自ら修行することで自身の救済を目指す。それ故、ミャンマーの人の多くが出家を経験する。一般人は20歳前の若いうちに出家し、仏教について約1週間にわたって学ぶ。また、20歳になってからも、僧侶として出家することが好ましいといわれており、一生に2回は仏教の修行をするそうだ。

人口の9割が仏教徒、13%（約800万人）が僧侶といわれるミャンマーの人たちからすると、日本人は本来の仏教の教えを守っているとは認めてくれないかもしれない。

人々の価値観と感性を共有

厳格な仏教の教えに基づき、人々が祈りをしたり、お供えや金箔を寄進したり、功德を積むために訪れる場所が、パゴダである。ヤンゴンで最も有名なのは、^{ぶつだ}仏陀の聖髪8本が献上され建立されたのが始まりとされる由緒ある巨大なシュエダゴンパゴダである。1044年に、アノーヤター王がバガン王国で即位して以来、国を治めるために上座部仏教を基に仏教国ミャンマー

の礎を築いたとされる。仏塔の高さが100メートル、境内全体が約6万平方メートル（東京ドーム約1.3個分）という広さである。筆者はヤンゴン滞在中に境内まで入る時間は取れなかったが、宿泊したホテルから同パゴダの入り口まで歩ける距離であったため、外からお祈りと記念撮影をしてきた。次回訪問時は、じっくりと本来の仏陀の教えである上座部仏教を味わってきたい。

ミャンマーの人々と親しい友人になるためには、彼らの価値観と感性を共有する必要があるのではないかとの境地に至ってきた。

また行きたい国ミャンマー

今年に入って1～2月と連続してミャンマーを訪問したが、人口5000万人強、国土は日本の1.8倍とアジアにおいて大きな存在感を見せるミャンマーには、上座部仏教に触れることを含めて、まだいろいろな地域、文化、歴史など、興味をそそるところが多い。しばらくは毎年訪問して多くを学び楽しむ機会にしたいと思う。



シュエダゴンパゴダの西門